Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-08

金裕貞文学の翻訳III ： 「夕立」「金採る豆畑」

朴, 鍾祐
石塚由佳

(Citation)
海港都市研究,16:43-67

(Issue Date)
2021-03-25

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81012831

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012831

金裕貞文学の翻訳 Ⅲ

――「夕立ち」「金採る豆畑」[72]――

朴鍾祐、石塚由佳

(Park,Jong Woo) (Ishizuka,Yuka)

1. 作品について

日本で翻訳された金裕貞作品が乏しいなか[73]、前々稿では金裕貞の主要作品の一つである「山里の旅人」(1933 年)と「炎天」(1937 年)を、また前稿においては金裕貞の故郷を舞台にした「チョンガーとカエル」(1933 年)、彼の鉱山での体験を基に書かれた「ノダジ(富鉱脈)」(1935 年)の翻訳を試みた。本稿ではそれらに続いて、彼が朝鮮文壇に彗星のごとくあらわれるきっかけとなった作品である「夕立ち」(1934 年)と、そのすぐ翌年に発表された「金採る豆畑」(1935 年)を紹介する。この作品が発表された 1934～1935 年は金裕貞の創作活動が最も活発に行われた時期で、中でもこの二作品は彼の代表作に挙げられる。

一作品目の「夕立ち」は朝鮮日報の《新春文芸》で 1 等に選ばれ、金裕貞の本格的な文学活動の契機となった作品とされる。この作品は、貧しい農村に暮らすチュノと妻が人生を立て直す資金を工面するため、夫婦で妻の売春に力を合わせる話である。

二作品目の「金採る豆畑」は、友人にそそのかされたヨンシギが小作地の豆畑を潰して、ひたすらに金を掘る話である。金は掘っても掘っても出ず、ヨンシギ夫婦の怒りと憎悪は極限へと達していく。

両作品には貧しい農村を背景に、夫婦と貧困、そして夫の暴力が描写され、貧困が家庭内暴力の原因になっていることが示されている。両作品の主人公とその妻は、売春や賭博、金鉱といった不安定な生業に人生を預けようとする短絡的な人物であるが、不条理のなか不器用ながらもそれぞれが夢に向かって懸命に生きる姿が印象的である。

しかし作品を読んでみると、いくつかの疑問が浮かんでくる。主人公らはなぜこれほど貧しいのか。農夫はなぜ畑を捨て鉱山(あるいは賭博場)へ向かうのか。そしてもしこれらの物語に続きがあれば、どうなっていたのであろうか。ここで作品をより深く理解するた

---

72 原題は「소낙비」、「금 따는 콩밭」(全商國編『金裕貞　小説選集　山里の旅人』ヨニンM&B、2016 年)。

73 これまで、長璋吉訳「椿の花」、「春・春」(『朝鮮短編小説選(下)』(岩波書店、1984～2000))、白川春子訳「山里」(『短編小説集　朴泰遠「小説家仇甫氏の一日」』(平凡社、2006))が翻訳・出版されている。

めに 1930 年代の農村と金裕貞の関わりについて、簡単に触れておくことにする。

2. 1930 年代の農村と金裕貞

1930 年代の朝鮮は日本統治時代の後半期にあたり、様々な植民地農業政策のただなかにあった。1910 年代には土地調査法の施行により、朝鮮の農民は土地を手放さざるを得なくなり、小作農が増加した[74]。1920 年から日本の農業生産力の低下を補う目的で産米増殖計画[75]が実施されると、日本経済の不況により日本人地主による土地の買い占めが起こり、朝鮮人農民らの貧困化はさらに加速していった。1932 年、窮乏した農民らによる抵抗運動を抑えるために、日本は農村振興運動を推進した。これは農村の「自力更生」を掲げて学校や農会(農民を構成員とする農民組織で、行政機関の補助機関的な役割を担った団体)などに農民指導を行わせたものであったが、農民の没落は止まらず、小作農と地主間の小作争議はさらに増える結果となった[76]。

高利の負債が年々高くなったことで、収穫した食糧も負債の返済に消え、山野の草木根皮を食べて飢えをしのぐ貧農数は、全人口の 1/4 を超える深刻さであった。慢性的な赤字で負債が累積すると、貧農は山地に入り山の森林を焼いて開墾する火田民か、都市貧民(土幕民)、あるいは満州や日本など国外に流浪移住していくほかなかった[77]。

農村がこのような状況であった 1931 年、金裕貞は兄への財産分与の談判と失恋による傷心を癒すため、故郷の忠清道シルレ村を訪れた。そこで彼は故郷の自然や人々に強く惹かれ、甥と共に開いた夜学の仕事に熱中した。同年に短い期間ではあるが、忠清道の鉱業所で現場監督の仕事も経験している。翌年には甥たちと農友会(後に錦屏義塾に改称、簡易学校として認可を受けた)等を組織し、識字運動をはじめとする農村啓蒙運動を行う中で、農村の人々と時に衝突しながらも深く関わったとされる[78]。

金裕貞が故郷の村に滞在した期間は二年にも満たなかったが、その間に着想を得て執筆した多くの作品には、当時の農村の現実が生々しく投影されている。本稿が金裕

---

74 竹並正宏「韓国社会福祉の歴史(1910～1945)」、川崎医療福祉学会誌 Vol.15、No.2、2006 年、355 頁。

75 産米増殖計画とは、朝鮮を食糧供給地とするために日本が 1920 年から実施した植民地農業政策。これにより日本人地主による土地の買収が一層激しくなるとともに、日本への米の流出が増加した。韓国史事典編纂会・金容権『朝鮮韓国近現代史事典』、日本評論社、2006 年、243 頁。

76 韓国史事典編纂会・金容権、前掲書、243～245 頁。

77 竹並正宏、前掲論文、356～357、362～363 頁。

78 全商國編、前掲書、304～308 頁。

貞文学はもちろん、当時の農村やそこに生きた人々を知る一助となれば幸いである。

＊金裕貞文学に関しては韓国国内でも編集されたものが多数あるが、本稿では、金裕貞文学村村長を務める全商國編集の『金裕貞　小説選集　山里の旅人[79]』を底本とした

3. 作品翻訳

1) 「夕立ち (소낙비)」

陰々とした黒い雲が空にもくもくと集まってくるのが、今にも一降りの雨が降り出しそうでありながらも、相変わらず意地悪な日差しは、幾重にも山の中に埋もれたへんぴな村を丸ごと飲み込むかのように熱していた。時折思い出したように山の神に取り憑かれた風は、田畑の木々を激しく揺さぶり荒れ狂った。山の外へ遠く農夫らを頼母子講の仕事へと追い出し、村の中の空気はわびしいものだった。ただつるりとした箱柳(はこやなぎ)の林から、荒涼とした農村を詠(うた)うかのようなセミの切ない歌…

ミーン！ミーン！

チュノは自分の家―この春に五ウォンで買って住み始めた朽ち果てたあばら家―の敷居に腰かけて右手で方杖をついて、土間で夕食にするじゃがいもを洗っている妻をじっと見つめていた。彼はこの三、四日ほど一睡もできずにひどくいらついていたせいで、畑仕事で老け込んでいた彼の顔はさらに蒼白に見えた。

妻にもう一度せがんでみた。しかし脅すような口調で、

「おい、それでどうにかして金二ウォンだけくれないか？」

妻はやはり返事がなかった。たった今連れてきた新妻のように、じゃがいもを洗うばかりで黙っていた。

できるかできないか、いずれにせよこうだという返事がないので、チュノは腹が立って死にそうだった。彼はよそから当てもなく入ってきた身なので自分を信じて金を貸してくれる人もなく、またそのみすぼらしい家を売ろうにもたった二、三ウォンの買い手すら付かず、まるで八方塞がりだった。しかしそれでも妻は年若く利口そうなので、金の二ウォンくらいどうにでもなるだろうと尋ねるのだが、聞く素振りも見せないので非常にけしからんと思った。

---

79 全商國編、前掲書。

彼は腹を叩きながらもう一度、

「ちょっと金を工面してくれないか？」

と、大声を上げた。

しかし、返事はやはりなかった。チュノは激怒し、突然敷居を押しのけすっくと立ち上がった。目を見開いて壁にもたせ掛けた背負子棒を手に掴むと、妻の横に風のように飛びついた。

「このあま！　夫の心配事を軽くしてくれるのが、一緒に暮らす嫁の良いところだろ？」

背負子棒は、妻の柔らかい腰を激しく殴りつけた。ぎゃっと叫んだ悲鳴は、残忍にも歪んだ垣根の隙間を抜けて行く。また背負子棒は、座ったままばったり倒れた妻のかかとを揃えた尻めがけて打ち下ろされた。

「このあま！　俺がいつからお前に頼んでるんだ？」

トラのように怒鳴って背負子棒を空中に再び振りかざしている時、妻は、

「あれまあ！」

と、一言叫ぶやいなや、体をひっくり返すと、ほとんど倒れ込むかのようにしおり戸の外へ飛び出した。顔に涙が流れたまま、慌てふためいた足取りで戸の前の丘を下り、小川を渡り、向かい側に通じる豆畑の道へ入り込んだ。

「てめえ、お前が俺から逃げてどこに行くつもりだ？」

行く手を塞ぐような怒鳴り声に、逃げていた妻は足が止まった。彼女は振り返って、しおり戸の中にいまだに背負子棒を持って立っている夫を眺めた。大人に向かって悪いことをした子どものように、口ばかりとがらせながら、夫が飛び出してくるか怖くてようやく口を開いた。

「セドルのお母さん家にちょっと行って来ます！」

もじもじと言い訳をしては、行きかけた道をまたまっすぐ歩き出した。妻としても、近頃この二ウォンの金が緊急に必要なことを知らないわけではなかった。しかし彼女の資格なり力仕事なりで、二ウォンという金をどうすることもできないありさまだった。

稼ぐと言ったっていくらにもならないこと……朝起きるやいなや人に後れやしまいかと、焦りながら山の方へ急ぐのだ。小さな籠を腰に下げて、木が生い茂った山中にちらほらと植わっているキキョウ、ツルニンジンを探しに行く仕事だった。深い山中のじめじめした石の隙間に。華奢な体で裸足にわらじを引きずってやせこけた尾根を伝って回ろうとすると、母の乳を吸っていた力までも溶け落ちるように、脂汗は頭から足の先までつうっと流れ落ちる。

下半身を一重に巻いた古びたチマの裾は、足に腰に絡みついて歩く邪魔をした。汗にふやけたふくらはぎは、険しい森に引っかかれて言葉にできないほど痛んだ。その上蒸し暑い土の匂いは、息がぐっと詰まるほど胸を刺す。しかし生きることに必死で純真な彼女の頭は、何の不満も起こさなかった。

ごく稀に雑然とした森の中にキキョウの芽でも一つ、二つ、つんと伸びたのを見つけると、彼女はそれでも喜びに満ちたほほえみを浮かべた。

時には岩にも這い上がった。本当に這い上がれないような険しい所なら、葛(くず)の蔓(つる)にぶら下がったりもするのだった。垢にまみれた木綿のチョゴリは脱いでパジの腰あたりに全部ぐいっと突っ込み、虎の森と知られる江原道の山奥にへばりついて全力で探し回る。谷風が通り過ぎる度に、裸に巻き付けたチマの裾を空中になびかせる。その度に赤黒い尻を遠慮なく見せて葛(くず)の蔓(つる)につかまった彼女を見れば、笑いこけて見続けられないだろう。しかし幸運にも奥深い谷間なので、そのざまをあざ笑う奴はカッコウだけだった。

こうして日暮れまでに慌ててさまよってみると、掘り集めたキキョウやツルニンジンを合わせて鉢半分、時には二杯余りにもなるのだ。そうすると里に下りて来て、飲み屋街へ行って、それを渡して麦飯と鉢変えした。しかし最近はそれさえも旬が過ぎたといって収穫がないのだ。その代わりに人の麦臼を一日中搗(つ)いてやり、麦飯一椀をもらって家に帰り、農地をもらえず暇にしている夫とともに分け合うのが、一日一日の生活だった。

そうしてみると金二ウォンはおろか、今すぐ首をはねたとしても血さえも出るか疑わしいほどだった。

もし金二ウォンを工面しようとするなら、知り合いの家で麦でも借りて売るより他にはすべがなかった。そして村中の女たちが羽振りを利かせて成り上がったと陰口を叩いてひそかに妬んでいるセドルのお母さんの他には、そんな稼ぎを持つ人はいない。ところが後ろ暗ければ尻餅をつくというように彼女は自分のそのざまに気が咎められて、派手なセドルのお母さんのところには死んでも行きたくなかった。セドルのお母さんも最初は自分と同じ卑しい農夫の妻だったのが、偶然神の助けで村の金持ちの李主事とねんごろに情を通じた後には、顔もめかし込んだ上に装いも着飾って食べ物に困らなくなり、すこぶる派手な生活を享受する身分になった。そしてセドルのお父さんもこりゃなんという幸いかというように妻を放り出したままさっと目をつむって、李主事からもらった服も着、くれる米も食べ、年々芳しくない自分の畑仕事からは手を引き、羽振りよく振る舞っているではないか！

実際はというと、チュノの妻がセドルのお母さんに死んでも行くまいとするその本音は

まさにここにあった。

ちょうど先の遅い春の月が抜けるように明るいある夜のことだった。

チュノが村の集会に出るため山のふもとへ出かけたが、夜が更けても帰ってこないので、家で待っていた妻はもう寝てくるのかと思ってちょうど寝そべって寝入ろうとした時、どうしたわけか突然牡牛のような奴が襲い掛かって来た。あわててチュノの妻をひどく押さえつけると、驚いて「わっ」と声を上げたので、振り向きもせずただ逃げ出したことがあった。

目立たない田舎のことなので別段うわさも立たずもみ消されたが、数日後になってそれが村の金持ち李主事の仕業であることにようやく気付いた。

そんなわけでチュノの妻はセドルのお母さんと直接関係がないとは言っても彼女に会うと訳もなく顔が火照り、何か悪いことでもしたようにぎこちなくなった。

そしてさらにセドルのお母さんが、

「奥さん、あたしは下着が三つで、靴下が四足もあるのよ。」

と楽しそうに見せびらかすそのざまを見ると、もしかすると自分を罠にはめようと皮肉るのではないかというひがみで決まりが悪く、顔向けができなかった。一方では、自分ももう少し上手くやったなら、今頃はセドルのお母さんのように贅沢ができたであろうまたとない機会を逃してしまった自分の行動に対する後悔と嘆きによって、心を悩ますその辛さも小さくはなかった。

しかしどんなに辱められたとしても、日ごとひどくなる夫のひどい暴力よりはましだろう。

今日は心を決めて、セドルのお母さんを訪ねてみようと思うのだった。

チュノの妻は今回足を運ぶことが無駄足にならないだろうかという一念で気を揉みながら、しだれ柳がずらりと一面に広がった畔(あぜ)道へ入った。彼女は田舎の女にしては整った顔だった。少し痩せたようなすらりとした体つきは、いわゆる村の売春婦でもやれそうな顔だったが、みすぼらしい衣服でかび臭い匂いは乞食に劣らない。彼女は左手右手で代わるがわるチマの裾を直しながら、肌がはみ出はしないかと恐る恐る歩いた。

荒れ狂った雲の塊が空一面を覆い尽くしてだんだん地面に垂れ下がると、とうとう峰に絡みつき殺風景にしてしまう。遠くから犬の吠える鳴き声が、前後ろの山に物寂しく響く。雨のしずくが一粒二粒落ち始めると、次第に太くなり、山にざあざあと激しく降り落ちる。

チュノの妻は道端に垂れ下がった栗の木の下に駆け込み、雨宿りをしながらセドルのお母さんの家を遠くに見つめた。北側の山裾のくぼんだところに位置し、高い垣根にぐるり

と囲われた見栄えのいい家がその家だった。しかし、しおり戸(萩でつくった戸)がきちんと閉められているのを見ると、おそらくセドルのお母さんが農業の役所に夕時の間食を運びに行ってまだ帰ってこない様子だった。

彼女はセドルのお母さんが来るのを見守りながら、ぼんやり突っ立って待っていた。

木の葉から雨のしずくがぽとりぽとり落ち、彼女の頬を伝って胸へと流れ込む。風が吹くたびに、冷気とともに太い雨脚を体に叩きつける。

雨にぐっしょりと濡れたチマが体にぴったりと絡みついて、腰に、尻に、脚に、肌の輪郭がそのまま透けて見えた。

かなり待っていたが、セドルのお母さんは帰って来なかった。あんまりにも嫌気が差してあくびをしながらぼんやりと立っていたところに、左側の丘から人が来る足音が聞こえる。彼女は振り向いた。しかしすぐにすばしこく木の隙間に体を隠した。

ふっくらと突き出たお腹の李主事が唐傘を差して、セドル一家の家に向かって尻を振りながら降りて行くところだった。たとえずんぐりしていても、立派な髭や村の中でもたった一人の<ruby>宕巾<rt>タンゴン</rt></ruby>(両班の帽子)をかぶった<ruby>恰幅<rt>かっぷく</rt></ruby>の良い五十前後の両班だ。彼はしおり戸の前へ行くと、自分の家のようにはばかりなく扉を押し開けて中へ堂々と入ってしまう。

これを見るとチュノの妻はまた心中穏やかではなかった。自分は犬や豚のようにいつでも殴られ逃げ回るのけ者だ。内外で可愛がられなまめかしく振る舞うセドルのお母さんとは、人となりが著しく違うことが彼女にははっきりわかった。セドルのお母さんの何不自由ないさまをあまりに羨ましがる反動で、自分も上手くやったなら、というとんでもない希望と後悔が前より何倍の痛みとなって彼女の心を切り裂いた。セドル一家の家をとめどなく眺めながら、知らないうちに長いため息が転がり落ちる。

丘から崩れ落ちる土砂崩れの泥水が足の甲まで覆いかぶさり、音を上げながら流れる。雨水にびっしょりと濡れた体は、次第に震え始める。

彼女は軽く身震いをした。そして戸惑った視線で四方を警戒して見た。誰も見当たらなかった。再び視線をそらし、その家を見つめながら心の中で思案してみた。中は間違いなく李主事だけだろう。先ほどまで閉ざされていたしおり戸や、垣根に干された洗濯物を今まで取り込まずにいるのを見れば、どんなに誓っても間違いなく李主事の他に人は一人もいないだろう。

彼女は雨に打たれることも気にせずその家へ走り込んだ。土間へさっと駆け上がり、

「セドルのお母さん、いますか？」

と、声を掛けてみた。

もちろん当事者の答えはなかった。その代わりその声がすると、居間から李主事が稲妻のように顔を出した。李主事は思いがけないといったように目をきょろきょろしながら、服の上にはみ出たチュノの妻の乳房、下腹、太ももから足の甲までちらりと陰険そうに見ては、ほろ酔い機嫌の顔つきでにんまりとする。そして李主事は土間へ、もたもたと出てきて、

「セドルの母さんのことか？　どういうわけか、今さっき出て行ったよ。すぐ戻ると言ったから居間に入って待ってれば、どうだ……。」

と非常に気の毒そうに、しどろもどろに言う。

「この雨の中、どこに行ったんでしょうね？」

「ちょっと出かけたんだ。でもすぐ戻って来るだろう……。」

「いると思って来たのに……。」

チュノの妻はこう独り言で気を落として残念そうにもじもじしながら、そのまま帰る素振りで土間の下の方に降りた。李主事を見上げながら、美しいツバメのようになまめかしく、

「では、また今度来ますね。ごきげんよう。」

と、別れの挨拶をする。

「もうじき来るっていうのに、ちょっと待って行ったらどうだい……。」

「また今度来ますから。」

「いやいや。ちょっと待ちなさい。おい、おい、ほら！」

チュノの妻が行くと言うので、李主事は恥ずかしげもなくその気になった。慌てて何とかして引き留めたが、とうてい駄目そうだ。チュノの妻がここに尋ねて来たのも大きな奇跡だが、雷も鳴り、またこんなへんぴな所という、こんなに心がそそられる機会はこの先二度となかろう。彼は目がくらんで口にくわえていた煙管（きせる）を抜き取り、部屋の中へ放り投げては、女の腰を後ろから抱きかかえて、無鉄砲に土間の上へ引きずり上げた。

女はひどく驚き、

「何するんですか。放してください。」

と、体を振り払おうと反抗する。

「いや、ちょっと待て。」

李主事はそれでも放さず、おどおどした目つきで女をなだめすかす。ずり落ちそうになるパジを左手でずっと抑えながら右腕では女をしっかり掴んで、手も足も出ず慌てふためきながらやっとのことで部屋の中へうんうんと連れ込んだ。中の引き手の鍵を素早く掛け

た。

外では激しい雨粒が白菜の葉に打ち付けられる音のせいで、木の揺れる音が騒がしい。時たまブリキ缶を落として転がしたような強い雷の音がオンドルの煙道を響かせ、天気は次第に薄暗くなった。

しばらく経った後だった。これくらいなら諦めただろうと安心し、李主事は息をふーっと吐き出す。不意なありがたい雨のおかげであがきもできず、騒ぎもできず、膝の前でおとなしくぐったりしている女を満足げに見つめながらなだめすかした。女は全身に汗がすうっと流れ、かなり暑い様子だ。壁に掛かっているセドルのお母さんのチョゴリを取り出し、女の体をきれいに拭き始めた。

足の指先から顔まで…

「お前、十九だって？」

と、李主事は酔った顔でそれとなく尋ねた。

「はあ…」

と、味気ない答え。女は李主事の手に押さえつけられて起き上がることもできず、死んだようにじっと横たわっている。

李主事は女の体を全部拭ってやってから一息吐き出して、タバコ一服をぱっと吸いくわえた。

「それで最近も旦那からひどく殴られてるのか？」

と尋ね、何の返事もないので、

「なんてこった、そうやってどうして暮らしていけるんだ。一日二日でもなく、人のことはわからないもんで、そうしてるうちにもし殴られて死んだら訴える所一つないんだぞ。だからお前の命が惜しけりゃ、とにかく戸籍を分けるのが良いだろう…。」

と女の身辺をしきりに心配しながら、ふと一つ気になることがあった。

「そういえばお前、産む時に子どもを亡くしたんだよな？」

「はあ…」

「産みたいのか？」

女は顔が赤大根のようになり、何も言えず顔をそむけた。

李主事もそれ以上聞かなかった。ところが、どういう奴の匂いなのか大根のナムルが腐ったようなすえた悪臭がずっと鼻を突くので、ひどく眉間にしわを寄せずにはいられない。はじめはそんなこととは知らなかったが、気付いてみると気分が悪くなった。彼は吸っていた煙管で女のへそ辺りをとんとんと指しながら、

「おい、このへそちょっと見てみろ。水があふれてるのに、これぐらい洗えないのか？」

と、せっかくの気分を害されたのが不満だというふうに、すっきりしない顔つきで舌打ちした。しかし女がこらえてこらえてもう恥ずかしさに耐えきれず、立ち上がってチマを着ようとすると、彼はかっと腹を立てた。服を奪って隅に投げつけては、またその場に引っ張って座らせた。まるで自分の娘でも叱るように泰然と咎(とが)めた。

「なんでそう女が落ち着きないんだ？　少しもじっとしていられなくて……。」

チュノの妻がその家を出たのは、入ってから約一時間後だった。雨は相変わらずざあざあと降る。彼女は汗にびしょびしょに濡れたまま出て来た。しかし意外に、いや幸運にも、今日のことは成功だった。彼女は跳ね上がりながら、にっこりした。あんな侮辱と恥は生まれて初めて受けたことで、災難の中でもひと際ひどいものだったが、成功は成功だった。幸運に与(あずか)ろうとすれば必ず苦労が伴うのが道理なので、これしきのことを何百回されたとしても、夫に殴られずに睦まじく過ごせさえすれば、彼女は拒む理由はないだろう。李主事を天のように、恩人のように感じた。夫に耕して食べる農地をやるから自分の妾になれというその言葉も申し訳なかったが、さらに金二ウォンをやるから明日の今くらいにセドルの家でこっそり会おうというその言葉は何より有難く、手に負えない荷物でも下ろしたかのように気持ちが楽になった。ただ気になるのは自分の行いが万一夫に発覚した時には、一発打たれて殺されるだろう。彼女は一方では嬉しく、一方では心配しながら自分の家に向かって激しく降りしきる雨の中を軽々と走り下りた。

チュノはまだ怒りが静まらず、ふくれっ面をして一人で座っていた。彼は自分の故郷の麟蹄(インジェ)（江原道北部にある郡）を離れてからもう三年になった。相次ぐ不作に農作物は言うまでもなく、それにより借金取りの脅しと悪態は日増しにひどくなった。ついには仕方なく家や所帯道具をそのまま置いて無一文で夜逃げしたのだ。住みやすいところを探すといって、年若い妻の手を引いてこの山あの山とさまよい歩いた。しかし、結局たどり着いたのがやっとこさこの村程度で、中身はやはり代わり映えはしない。どの山里に行って鎌を持ってみたって情はちっとも移らず、そこにはただ冷ややかな不安と餓えが両手を広げて彼を待っているばかりだった。とんでもないと言って農地もくれない。仕事がないので、手間仕事ができない。飯がない。結局、彼は疲弊していく農民の間を漂うとんでもない嫉妬心で体がそわそわした。ここ数日裏山の奥を越えたところで、毎晩大きな賭博場が開かれる気配を感じ取った。彼は自分も大きな利益を得ようと息巻いたが、なかなか手元資金を作ることができなかった。

二ウォン！　運が向いてこの二ウォンを上手くやれば、すぐさま運が開くことはないなんて誰が言いきれようか！　三、四十ウォン儲かれば村の借金もだいたい返し、服一着仕

立てて着て、うんざりするこの山里を離れようというのが彼の胸の内だった。ソウルに上京して妻は住み込みで家政婦をし、自分は労働して二人でしっかり稼げば安楽な生活ができるだろうに、こんな山奥で餓え死ぬ気はなかった。それで若い妻に金をちょっと持って来いと言ったのにこっちへ逃げあっちへ逃げ、殴られるのを避けて助けてもくれず、そのあり様といったらまったくけしからん。

妻が水に落ちたハツカネズミのように家に飛び込んで来るや、まだ口を開く前に夫は歯を食いしばって頬を強く拳で殴りつけた。

「このあま、こそこそ逃げて、どこほっつき回ってたんだ？」

一発食らって妻は呆然とした。それでも気が済まず夫がまた鞭を手に掴もうとすると、妻はびっくりして助けてくれと手を合わせて許しを請いながら、よろよろと口を開いた。

「明日用意できます…。明日、金、用意できます…。」

と言いながら、金が工面できることを丁重に伝える彼女の声は半分泣き声だった。

夫が半信半疑で目をぱちつかせて、

「明日？」

と、声を上ずらせた。

「はい、明日用意できます…。」

「必ずできるのか？」

「はい、明日できます…。」

夫は田舎の事情に精通していただけに、思いがけない金二ウォンがどこからどうやって出るのかまでは追及して尋ねようとはしなかった。彼はいくらか安心した顔で、敷居に腰かけて煙管に火をつけた。ようやく妻も安心してじゃがいもを茹でに台所へ入ろうとすると、夫がそばに近寄って来て気の毒だというように止めた。

「病気になるぞ、部屋に入って早く服を乾かせよ。じゃがいもは俺が茹でるから。」

墨汁のように濃い夜の帳（とばり）が下りた。雨はもっと音を立て、薄い彼らの部屋の壁の前後で響く。天井から雨は漏れないが、家を建てたのが古くオンドルの煙道が下がってしまった部屋なので、壁紙が貼れない床には水が染み込みじめじめとして汚らしい。その上、むしろも葉っぱを丸く敷いたばかりのものが彼らの寝室だった。石油の火はなく真っ暗な、まさに地獄だ。ノミはあちこちで思う存分もぞもぞしている。

しかし、何も掛けずにどこででも寝ることに慣れた彼らは平然と並んで横になり、激しく降り注ぐ夜雨（よさめ）の音に耳を傾けていた。貧しさによって夫婦間の愛情を知らずに、日々鞭を打って不平と恨みの中でしっちゃかめっちゃかな彼らも、今晩はにわかに仲睦まじかっ

た。

ただただ人の懐に入っている金二ウォンを夢見つつ…

「ソウルにいつ行くんです？」

夫の左腕を枕に横たわっていた妻が、夫に向かって甘えるように尋ねた。彼女は夫にソウルの派手な街や厚い人情について何度か聞いたことがあって、日ごろもどかしい気持ちで夢見てみたが、実際に見物することはまだできなかった。早くこの苦労から抜け出し、住みやすいソウルへ行きたいという思いでいっぱいだった。

「借金さえなくなれば、今すぐにでも行けるだろうに。」

「借金は後で返しても、早く行きましょう。」

「心配いらない。今月中には必ず行けるだろうから。」

夫はすんなりと快諾した。確かに彼はこの村では勝負師として名が通っていて、賭場の最高点くらいはたやすく出すほどの腕利きだった。明日の夜二ウォンを持って稲妻のように賭場に走って行って、ある金をすっかり持ってくることを考えると、彼は密かに喜んだ。そして巧みな自身の才能を一人偉ぶった。

「今回がソウル初めてだろ？」

と言って、彼はソウルの地を一回踏んだからと大きな顔をして、腕で妻の頭を揺すりながら聞いた。もともとせっかちなので、今からソウルに行く準備を着々と進めておきたかった。彼が一番心配だったのは、山里の隅から田舎者の妻を連れて行ったらソウルの人に馬鹿にされるだろうし、邪魔になることが多そうなことだった。それで、ソウルに行けば必ず守らなければならない必須条件を、妻に一々説明せずにはいられなかった。

第一に方言についての注意から始まった。農民がソウルの人に田舎者と呼ばれ、弱みに付け込まれる理由は何より方言にあるから、方言は使わずに「しますか」や「します」のように標準語に直して、言葉尻を上げてはいけない。また道端でのそのそするのは、私は田舎者ですという間抜けな真似だから、歩く時はさっさと歩き、目はしっかりと見開くんだ…ということなどだった。

妻はそのくどい説教を注意深く聞きながら蚊の鳴くような声で、はい、はいと言った。夫は二時間ほど休む間もなく、細かく注意点を確かめておいては、ソウルの風習や生活方式などを自分の意見のままにもっともらしく話しているうちに、いつのまにか化粧の仕方にまで話が及んだ。田舎の女がソウルに行って住み込みで家政婦をするなら、数年後には家まで手に入れられるが、それには顔がきれいでなければならないという噂を前に聞いたことがあったからだった。

「だから毎日油も塗って、おしろいもつけて、足袋(たび)も履いて、主人に気に入ってもらわなきゃ……。」

ますます調子に乗って話しまくっていると、横からすやすやという音が聞こえるので横を見てみると、妻はすでに深く眠り込んでいた。

「けしからん奴だ。人が話してるのに、人の話も聞かずに勝手に寝てるのか…」

夫は一人でぶつぶつつぶやきながら、右腕を上げ、額の上に乱れた妻の髪を後ろへと撫で解かす。この世で大切なのは自分の妻…この妻がいなかったなら、自分は一人でどうやって生きて行けようか！　なんといっても夫なのに、今日まで服一着ろくに着せてやれず、苦労ばかり掛けっぱなしのその罪があまりにも大きいようで、胸が痛んだ。彼は力強い腕で妻の腰を抱きしめ、自分の前へぴったりと引き付けた。

夜通し激しく降っていた雨音が朝になるとようやく止み、昼頃には眩しい日差しまで差し込んだ。ごぼごぼと田んぼの畔(あぜ)から流れる水の音が騒がしく聴こえる。小川で魚を捕まえる子どもたちの叫び声や、農夫らの楽しそうな民謡も力強く聴こえる。雨はチュノの心配も洗い流したように、今日は彼らにも陽気な光が見えた。

「夕時の間食の頃になっただろう。早く髪を整えて行ってみろ。」

彼はたまらずに、妻をしきりに急かした。

「まだまだでしょ。」

「まだまだとは何だ。もう遅れてるぞ。」

「何よ！」

妻は夫の言葉通りに早くから髪を解かして座っていたが、もともとひと月余りも解かさずに絡みついた髪は非常に時間がかかった。彼は虎のような夫と久しぶりに温かい情を分かち合ったので、最近には見られなかった喜びの色が顔に浮かんだ。ある時には照れくさそうに笑ってみせたりもした。

妻がぐずぐずするのが見るからに大変もどかしかった。夫は妻の手からぐいっと櫛を抜き取っては、てきぱきとした手つきでさっさっと解き下ろす。解き終わった後、横に置かれたどんぶりの水を手のひらに塗り伸ばしながら、頭につやつやと伸ばしておいた。そうしておいて上から髪の毛を撫でつけて、きれいにかんざしを挿してやると、今朝一生懸命心を込めて編んでおいたわらじを妻の足に履かせ、拳で軽く押さえつけながらきれいに整えた。

「さあ、行ってこい！」

と言って、

「すぐに帰って来いよ、な？」

と夫はその二ウォンをそっと受け取ろうと、問題ないように、失敗しないように妻をめかし込ませて送り出した。

2) 「金採る豆畑（금 따는 콩밭）」

土の中、その下はいつも陰気だ。

くたびれたカンテラの灯り。力なく青白く光る。夜と違って昼はひどくぼんやりしていた。

表には黄土の壁で、前後左右がしっかり塞がった非常に狭い穴。まるで墓の中のようにむさ苦しい。冷ややかな沈黙。土臭い匂いと気味悪い冷気だけがその中に立ちこめている。

手鍬は、続けて土をほじくり返す。荒々しく突っつき下ろし、

ずぼっ、ずぼっ、ずぼっ…

こんなやぼったい音ばかり。しかし、ばらばらと壁が崩れる。

ヨンシギは仕事の手を休めて、そでを引き寄せて顔の汗をしごく。この鉱脈の筋がいつになったら見つかるのか呆然とした。土一握りをつまみ、鼻の下に押し当てて指でくまなく探してみる。まったくの廃石ではなさそうだ。しかし、雑多な廃石がすべてほぐれたわけでもなかった。馬糞のようにほぐれやすい廃石まで掘り当ててこそ金が出るというが、なぜこんなにも出ないのか。

手鍬を再びつかみ取る。地面にひざまずき、尻をぐっと上げたまま、はあはあとあえぐ。手鍬をむやみに打ち下ろす。

地面から水が染み込み、膝まで浸って濡れた。鉱山の穴が崩れないように柱を建てた天井から泥水が降って来て、首筋に滴り落ちる。ある時には上壁の片方が落ち、背中をどんと打って砕ける。

しかし彼は瞬き一つしない。金を掘り当てると言って、豆畑一つを全部駄目にした。やきもきして必死になり、目がくらんでどうしようもない状況だ。手のひらに唾をぺっと吐いて、手鍬の柄を一度握り直すと休むことを知らない。

背中の後ろからは、がりがりと土を掻く音がする。まだ廃石を全部取り除けなかった様子だ。こいつ仕事してるのか、詩でも詠んでるのか。人がはらはら気をもんでるのに、どうしてこうも図太いんだ。

ヨンシギは殺気を帯びた視線で振り向いた。黙ってスジェを睨みつける。ようやくのろのろと荷かごに土を入れて背中に担ぎ、はしごを登る。

坑が緩んだのか壁がぐらっと動いた。土が崩れ落ちる。前日ならここで妻に一度も会えずに犬死するのではないかと身の毛のよだつ思いをしただろう。しかし、今やそうなりたいとさえ思う。

スジェという奴と土の山に埋もれて一緒に死ぬなら、その方がむしろ良いだろう。

そう思うほど、ひどくひどく憎らしかった。

こいつがほらを吹いたせいで、何の関わりもない豆畑一つばかり無駄にしたのだ。それだけでなく全てに困惑することになった。三つ目の田んぼも草取りできなかった。畔(あぜ)の草はひょろりと伸びきったまま、乱雑に広がっている。この様子を知って、地主は激怒した。来年からは農耕はするなと地団駄を踏んだ。土はいくら掘っても、兆しがない。この程度でも5尋(約7.5メートル)ははるかに超えただろう。もう少し深いのが良いのか、あるいは北の方に幅を広げるのが良いのか、ぼんやりとためらっている。金掘りは素人だ。今までスジェの指揮を受けて仕事をしてきて、これからもやはりそうしてこそ金が取れるのだろう。しかし、そんな陰気くさい真似はしたくない。

「こっち来い。ここちょっと掘れ。」

彼はつっけんどんに威張りながら、こう命令した。そして自分は立ち上がって、手をはたきながら後ろに下がる。

スジェは反対することなく、言う通りにした。言われる通りに地面にひざまずいて鎌で廃石をかき出した後、また掘り始める。

ヨンシギは取った残りの廃石を担ぐ。どでかい体をふらつかせながら、ぎしぎしとはしごを這い上がる。坑口を出て廃石の山に土を投げ捨てようとした時、

「なんでまた掘ってるんだ。気でも狂ったのか。」

山から下りてくる小作管理人と鉢合わせてしまった。気が遠くなって、そのままぼんやりと立ちすくんだ。今日はまたどんな暴言を浴びせられるのだろうか。

「掘るなって言うのになんでまた掘ってるんだ。」とヨンシギの背負子の後ろを杖でがんっと突くと、「耕して食うための畑だろうが。土をかぶって中に入れってのか。この馬鹿野郎めが。豆畑から金が出るなんて悪ふざけもたいがいにしろ。」と首に青筋を立てて怒る。畑を台無しにしたら、管理を怠った自分のせいになる。毎日来てはやかましく禁じても、次の日見るとまた相変わらず掘っているのだ。

「今日にもこの穴を元通り埋めておかなかったら、明日にでもすぐ刑務所に送るぞ。」

あまりに怒ったので、言葉も上手く出てこずたどたどしい。拳がすぐに飛び出すかのようで脇腹がぶるぶる震える。

「今日だけやってみて止めますから。」

ヨンシギは顔を赤くしながら、かろうじて一言言った。そしてひたすら頼み込んだ。

小作管理人は、聞く素振りも見せず行ってしまう。

その後ろ姿をヨンシギはぼんやりと見送った。そうして豆畑の畝を覗き見ると、ひどく腹が立ってきた。まともな畑に穴が四方ぼこぼこに開けられていた。

あちらこちらに廃石は幾山にも積まれていた。まるで急造した共同墓地のように入り乱れ、はなはだしくみじめな光景だ。それなりに上手く育てていた豆の株はほとんど廃石の山の下敷きになってしまい、ところどころ運よく残ったものだけが首をなびかせている。そのありさまを見るのは、子どもが死ぬ方がましなほど、とうてい見ていられないみすぼらしさだった。

農地はすっかり駄目になるだろう。しかし一体全体、今年の小作地の稲二石半は何で賄えば良いのか。その上、畑を駄目にしたので、ややもすると刑務所に行くことになるかもしれない。

ヨンシギが穴の中に入って来た時、連れは地面に座り込んで休んでいた。何事もなかったかのように、タバコばかりぷかぷか吸っているのだ。

「いつになったら掘り当てられるんだ。」

「そろそろ出てくるだろうよ。」

「そろそろ出るって？」と鼻でせせら笑って皮肉り、少ししてから

「この野郎。」

土の塊をつまみ上げて、頭に打ち下ろす。

スジェは、あーっとそのままばったりひっくり返った。そうして、すっくと立ち上がった。目に留まるままに手鍬を掴むと、すぐに飛びかかった。しかし、強弱不同(弱者はしょせん強者の相手にはなり得ない)。頑強な腕にはじかれ、壁にどしんと落ちた。その瞬間に自分が取られた手鍬が、脳天をめがけて飛び込んでくるのを見た。首をさっと回す。手鍬は土壁をずぼっと突き刺し、再び離れる。

スジェの名前だけ聞いても、ヨンシギは腹が立って歯ぎしりするほどだった。間違いなく、まんまと騙されたのだ。

ヨンシギはもともと金鉱の経験がなかった。そして興味もなかった。ただ畝間にしゃがみ込んで、汗を流しながら黙々と仕事をするだけだった。今年は豆も予想外によく実って、少し安心していた。

ある日、一人で草取りをしているところに、

「なあ、暑くないのか。ちょっと休んでからやれよ。」

頭を上げてみるとスジェだ。農業はせずに金鉱ばかり巡り歩いていたが、どういうわけでまたやって来たのか、にこにこしている。良いことでもあったのかと思い、

「金でもたくさん稼いだのか。俺にも貸してくれよ。」

「もちろん稼いだどころか、思いっきり食べて使ったぜ。」

酒に酔った顔で偉そうにごちゃごちゃ言う。そして畝(うね)の端にしゃがみ込んで、しばらく無駄話をすると、

「お前、金儲けしないか。この畑に金が埋まってるぜ、金が……。」

「何？」というと、

すぐそこの山を超えた大きな谷に鉱山がある。鉱夫を三百人余りも雇っている鉱山で、毎日採れる金が七十両を超える。金(かね)で換算すれば、七千ウォン。その鉱脈の筋が大きな山の腰を貫いて、この豆畑へ伸び出したというのだ。二人で掘れば、ほんの十日のうちに筋を見つけるだろうし、少なくとも一日に三匁(もんめ)ずつは取れるだろう。まず三十ウォンだけでも、どれほどになるだろうか。牛を買うとすると、半頭ほどにもなるじゃないか。

しかし、ヨンシギは耳に留めなかった。金鉱なんて、刃を咥(くわ)えて走る徒競走みたいなもんだ。上手くいけば良いが、駄目なら一生が台無しだ。こう前から聞いた話があってのことだ。

次の日も来て、そそのかして行った。

三度目は家にやって来たのだが、マッコリ一瓶をがっしりと手に持って騒ぎ立てる。やきもきして、またやって来たのだ。土間に腰かけて夕食の膳をまじまじと見つめると、粟の重湯は腹の中のものをすっきり洗い流してくれるとか、労働者はしっかり食べなくちゃならないとか、ある人が畑を買うだのと騒ぐが、こうしていてやめるつもりなのかとか、面倒くさくぺちゃくちゃとしゃべる。

「奥さん、これちょっと飲ませてくだせえ。」

そしてようやくヨンシギの妻に酒瓶を差し出す。彼らは膳を前にして座り、楽しく酒を交わした。何杯かの酒が入ると、ヨンシギの考えも少し変わってきた。言われてみれば、一年苦労してやっと豆数石取って食べるよりは金を掘る方が賢い気がしてきた。一日でも

上手く掘りあてさえすれば、一年間ずっと苦労して収穫するよりはるかに金(かね)になるだろう。今年の春の肥料代、労賃、借金した七ウォンのせいで一日一日がせき立てられるこの頃だ。こんなにちまちまと生きるくらいなら、一か八か男気を出して一度やってみるか。

「明日から俺たち掘ってみようぜ。金さえあれば、あんな豆くらい。」

スジェがしつこく催促して急かす時、あっさりと承諾した。

「そうしてみようか。何くそ、駄目なら駄目でいいじゃないか。」

しかし後ろの方で粥を食べていた妻が、脇腹をこんこんと突っついたから良かったものの、そうでなければ少し躊躇するかもしれなかった。

妻は妻なりの勘定が早かった。

金鉱掘りがもはや世の大勢だった。下手に農業ばかりやっていたら、結局は乞食にしかなれないだろう。近いうちに山も田んぼも畑も関係なく金鉱野郎の手で穴があけられ、ひっくり返されてめちゃくちゃになるだろう。その時は何を掘って食っていくのか。よく見てみろ。作男たちは口合わせたかのように畑を放り出して、さっさと金鉱に逃げ出してるじゃないか。働き手がいなくて今年は農作業ができないとかどうとか、村では騒がしい。そしてこの村の豪農がそれを追いかけて、草取り鎌を放り投げて川辺に小川に砂金を掘りに走る。そうして数日後には足袋を綿金巾(かなきん)で覆って、自慢げに見せつけているではないか。

妻にとっては豆畑から金が出るとはまったく夢にも見なかった。驚きながらもまた嬉しかった。今年はいつも唾ばかり飲み込んでいたあの干し鱈を思い切り食べてみようと思うだけで、胸がいっぱいになってじいんとしてきた。裏のヤングンさんの奥さんは金鉱のおかげで、夫が買ってくれた白いゴム靴を履いて自慢げに気取って歩くのがとても羨ましかった。自分も早く金でもじゃんじゃんあふれれば、白いゴム靴でも履いて顔にはおしろいも塗ってやろう。

「そうしてみましょうよ。あの旦那の言う通りにすれば間違いなく上手くいくんだから…」

戸惑いながら座っていた夫に、こうそそのかしたのだ。

日が昇るやいなや、早々と豆畑に集まった。

スジェは注文でもするかのように、こっちに向かってぶつぶつ、あっちに向かってぶつぶつつぶやいた。そしてあたふたしながら行ったり来たりした。自分なりに土の中に眠る鉱脈の筋のありかを大まかに見当づけてみるのだった。

しばらくの間、畑をさまよいながら山側にくっ付いた片隅にぴたりと立ち止まり、指をさして説明する。大きな筋は、本来鉱脈の元になる山を挟んで回っているはずだ。この筋

が富鉱脈であることは間違いなく、外に若干伸びて眠っているだろう。だからここから掘っていこうということであった。

ヨンシギはその言葉がどういうことなのかよく理解できなかった。しかし金鉱には通じているというスジェなので、その言葉通りにすれば確かに鉱石が出るんだろうとそればかり固く信じた。文句も言わずに指示されたところにシャベルをぐさりと突き刺し、掘り返し始めた。

金も金なら丹精込めて育てた豆も豆だった。ほとんど立派に育った豆がシャベルの先に潰れて土に埋もれていくのだ。それを見るのは非常に心が痛んだ。やる瀬ない思いが押し寄せる時、時折シャベルを置いて腰を曲げて、豆の葉の土をはたき落としてやったりもした。

「おい、お前。そんなことしたら、俺が悪者みたいじゃないか。それを見てどうするんだ。金を掘れってば。」

「違うんだ、腰が痛くて…」

面と向かって責められて、ちょっときまりが悪かった。確かに金さえ上手く掘り当たれば、これしきの豆畑くらいなんのことはない。この畑を耕して田んぼでも作れるのだ。目を閉じてしまって、シャベルの土をいい加減に豆の葉の上に放り投げる。

「黙って土地を耕して食ってりゃいいのに、こりゃ何の真似だ！」

村の老人たちはしょっちゅう訪ねて来て、聞くに耐えないことを言いもした。

畑に穴を三つも開けた。そしてしきりに掘るのだった。金か、めった打ちにされるか、そのために農夫を捨てた。これがきっと世が滅亡する兆候だろう。その大切な畑に穴を開けてこのざまなんだから、豆がまともに残るもんか。

老人は怒りの勢いに任せて、相手に杖を突き付けずにはいられなかった。

「雷にでも当たっちまえ。」

「心配しないでください。誰も知らないんだから。」

ヨンシギはその度に不機嫌そうに言い放った。腹立ちまぎれに土をいい加減に放り投げては、唾をぺっと吐いて穴へ入って行く。しかし心の片隅ではいつもすっきりしなかった。鉱脈の筋を探すといって、豆畑を一面ひっくり返した。そして筋がいつ出てくるかは未だわからない。田んぼも草取りできず、水も見られず、稲がどうなったのかそれさえわからない。夜は眠れず、目を開けたまま気を揉んでばかりいた。

スジェは落胆する様子もなく、いつも通りだった。地面に体をすくめて、のろのろと遊

びながら地面ばかり掘る。

「筋はすぐに出るのか。」と首を長くして聞くと、

「今度出なかったら、おれの首を切ってくれ。」

ためらわずに自信満々に言って、ひるまなかった。

これを見るとヨンシギも少し安心するようだった。金が出なければ、俺だって何をやりがいにこんな苦労をするだろうか。必ず金は出るだろう。それでようやく損害は致し方ないと、やめようとしていた絶望がすっと消え去り、再び拳を握り直したのだった。

真っ暗に夜は暗かった。どこからかたくさんの犬たちがやかましく吠える。

夫は泥まみれになって山から下りて来た。しょんぼりとして身なりを整える気力もないまま、オンドルの焚口にだらんと伸びた。

このざまを見ると、妻はまた気が抜けてしまう。今日もまた駄目だったんだな。金がどっと出れば家を一軒買うと自慢していたが、無駄だった。もうすでに腹が立って、顔を上げて外へ出て行く恥ずかしささえなくなった。

夫に夕食を持って行ってやり、哀れそうに見つめる。

「もう借りて来た食糧もみんな食べたんだけど…。」

「明け方に山神祭を執り行うから、もう一度だけ借りて来い。」

人の言葉には答えず、ぼんやりとはっきりしない口調で言うだけで、そして寝そべったまま目をじっと閉じてしまう。

「お粥の材料もないのに、山神祭なんて…。」

「聞きたくない！　不吉な女め。」

この怒号に、妻は一瞬体が凍り付いた。最近になってはむやみに訳もなく腹を立ててばかりいる夫が一層哀れだった。気が動転したのか夜も眠らず、むやみに騒ぎながら食ってかかろうとする。その上、子どもが少し泣いても、この野郎放り投げてしまえ、と騒ぎ立てるのだ。

夕食を食べないのでそのまま片付けてしまった。夫の命令に逆らいにくく、ヤングンさんの奥さん家にも再び行かないわけにはいかない。その間、食料は立て続けに借りては食べ、返せもしないのにまたどんな面目で口を開くか困り果てた状況だった。

彼女は考えた末に、恥をさらしてもう一度訪ねて行くのだ。そして、いざばったり会って口を開くと、

「明日山神祭を執り行うんだけど、米があった方が良いですよね…。」というと、やはり

恥ずかしくて、焚火が飛んで来たように顔が赤くなる。

しかし、彼らは相当善良な人たちであった。

「そうですとも。山の神がへそを曲げたら、お粥すら召し上がらなくなってしまいますよ。」と答え、その夫はにっこり笑う。なにせ金鉱で長くすり減らした体だから、こういうことにはある程度心が広かった。手ずから米五升をすくってくれながら、

「山神祭をせっかくするなら、誠意を込めてやらなければいけません。山神はよく怒りますから。」と、その秘法まで諭して見送る。

米を受け取って出てきながら、ヨンシギの妻は有難さより先に申し訳なさで顔がまた赤くなった。そして彼ら夫婦の生活が本当に本当にひどく羨ましかった。ヤングンさん家の夫は毎日金鉱を回りながら廃石の山をくまなく探し、鉱脈から離れて石と混じった鉱石を拾って来る。それを一日中礎石(そせき)で研げば、運が良ければ二、三ウォン、損しても七、八十銭ずつは毎日儲けになるのだった。そうすれば、米を買う、反物を買う、餅を作る、長利を貸す(春に穀物を貸与して秋にその半分を取ること)…　ところが、私たちはなぜいつもこのざまなのか。考えるだけでも、胸が張り裂けそうに息苦しいため息が何度も出るのだった。

妻は家に帰って来て、うるち米を浸した。明日は何で粥を炊いて食べるのか。オンドルの焚口から遠い下座に身をすくめて座り、向かい側に寝転んでいる夫を横目でこっそりとにらむ。他の人は歩き回りながらよく金を拾って来るのに、あのならず者は自分の足一つ捨てても金一粒拾って来れないものか。えいっ、くそっ、ろくでもない男め。自分でも知らないうちに浅いため息が重ねて二回出る。

夜が更けて、夫婦は餅を作りに出て来た。夫は臼でどしんどしんとひいた。しかしふるいがない。村を歩き回りながら借りて来るため、妻は忙しく出入りした。

「なんでここに座ってるのさ。火をくべたらどうだい。」

餅を搗く途中で、気が抜けてぼうっと座っている夫が憎らしい。人はあれやこれやと気をもんでいるのに、あいつは何を思ってあそこにいるのか。鎌で枯れ枝をてきぱきと裂いて投げてやりながら、妻はひそかに嫌味を言った。

鶏が二度夜明けを告げて、ようやく餅ができた。

妻は甑(こしき)を頭に載せ、夫は脇にござを抱えた。そして真っ暗な山道を登って行く。

坂道をいくらか登って行くと、豆畑があった。全面にそびえる黒い山に取り囲まれてふさがったところだった。端で欅(けやき)や棗(なつめ)の木々は喪に服していた。

畝の両端の手前で夫は歩みを止めると、後ろの妻を振り返って見る。

「こっちに置け。それからここでじっとしてろ。」

甑を受け取って片方の腕で抱え、彼は一人で豆畑に登った。前に積まれた土すべてが山になっていて、その周りを回ろうとした時、おそらく石を蹴ったようだ。体が倒れそうにふらつくと、妻はびっくりして駆け上がって彼を支えた。

「罰が当たるのに、なんで上がってくるんだ。いやらしい女め。」

夫は体を立て直すとむやみに声を上げながら、妻の頬を思わず殴りつける。そうでなくても死ぬか死ぬかと言ってるのに、不吉にもこのあまが。彼は気に入らなさそうに、ぶつぶつ言いながら畑に入って行く。

畑の真ん中にござを敷いて、その上に甑を置いた。そして甑の前で、丁寧に真心を込めて大きく二度敬礼する。

「私たちをお助けあそばせ。山神さまが助けてくださらねば、私どもは死ぬほかになすすべがありません。」

彼は手を合わせてこうお祈りした。

妻はこのありさまを見つめながら、毒が吹き出物のように膨れ上がった。金鉱を掘るといって金一粒も掘れないのが、癖ばかりだんだん悪くなっていく。以前はなかったのに、最近は何かにつけてばしんばしんと殴る良くない癖がついたのだ。金を取れと言ったのに、頬を殴れとでも言ったのか。どうかおかげさまで、あいつの金が取れませんように。彼女は頬を殴られた恨みから、精一杯呪った。

もっとも妻の言葉通りになった。十日が過ぎても、山神からは何の便りもなかった。夫はいつも目をむいて、穴に閉じこもっていた。たまに家に帰って来る時には顔が青ざめ、肩がだらんと垂れ下がってほとんど病人だった。そうしてから黙ったまま大きな図体をオンドルの煙道にどしんと放り投げるのだ。

「えいっ、くそ野郎が、死んでしまったら良かったのに…。」

あるいはこう嘆いたりもした。

妻は瓢(ひさご)に入れた昼食を頭に載せて家を出た。赤ん坊は背中をたたいて喜び、きゃっきゃっと叫び声をあげる。

もう白いゴム靴だの鱈の一夜干しだのは、考えることすら嫌になった。そして金という言葉だけ聞いても、口に嫌気がさすほどであった。それはそうと、借りて食べた食糧をせき立てられなければ、それだけでも良いのに。

秋は田んぼに畑に黄色くなり、農夫らは嬉しい顔をして、互いに会えば楽しい冗談。し

かし夫は巻き添えを食った畑を台無しにし、田んぼすら手入れできなかったので、この秋には何を刈り入れて、何を楽しむのか。彼女は村の人の目が恥ずかしく、山道に回った。

松林を出て遠く外を見渡してみると、二人とも出て来ている。今日もまた喧嘩した様子だ。一人はこちらの盛り土に座り、一人はあちらに座って互いに顔を背けて、煙草ばかりすぱすぱ吸う。

「お昼召し上がってください。」

夫の前に瓢を下ろしながら、じっと様子をうかがった。

夫はチョゴリが破れ、顔に傷が付いていた。そして両腕をまくり上げて、遠くの山に向かって黙って座った。

スジェは土に埋もれて出て来たのか、顔はおろか耳の中まで土まみれだ。鼻の下にはかさぶたがこびりつき、まだ少しずつ血が流れ落ちる。ヨンシギの妻を見ると、きまり悪そうな様子だ。顔を背けて、少し離れて舌なめずりをする。

金を掘れというのに、一日血ばかり出しては乾かしているのか。人が借金をせきたてられて気をもんでるのに、何と贅沢な真似なのか。妻は気に食わず、眉間に皺を寄せた。

「山神祭をするって借りて来たものは、いつ返すんですか…。」

ぶすっとしている夫に向かって言葉尻をひん曲げる。しかし夫は眉一つ動かさない。今度は口調を強めながら、

「返せもしないものをなんで借りてこいって言ったんです。」と怒鳴った。

この言葉は、夫の未だ収まらない怒りを再び刺激する。

彼はすっくと立ち上がり硬く握りしめた拳で、はらわたが飛び出すほど妻の頭をぶん殴った。

「生意気なくそ女が。縁起でもないことを…。」

他のことは知らずとも、拳にはくらっとした。不格好にはむかっては、頭が砕ける。怒りをこらえてぶるぶる震えていたが、やがて妻は背中に負ぶった子どもを引っ張り出した。夫にそのまま押し付けると、子どもはぎゃあぎゃあと泣きじゃくる。

そして妻は背を向けて、独り言で、

「豆畑で金を取るっていう愚か者がいるだろうか。」と、当てこすって皮肉る。

「このあまが、何だと。」夫はすぐに飛びかかって、その頬に再び硬い拳を食らわせた。本来ならば、女なんだから慰めてくれるところを、逆にむかむかと怒らせるばかりなのか。えいくそっ、こうなれば、どうにでもなれ。

「お前とは住むもんか！　今すぐにでも出て行け。」

妻をぐいっと畔に突き飛ばした上に、その脇腹を足でどんと蹴った。妻は息を詰まらせて、はっと口を開ける。

「お前がやれって脇腹をつっついたくせに、今さら何だ！　この不幸者め。」

そしてまたどんと蹴った。続けてまた、どん、と。

この様子を見ると、スジェは焦った。そうしているうちに、いつのまにかその怒りの矛先が再び自分の方に向けられるだろうと思った。今度こそ、そうなれば殺される。彼はひょろひょろと、穴の中へすっと消えて行った。

日差しはうららかな秋の香りを漂わせる。主人を失った豆は、重い実をまるまると土に転がしている。向かい側の山のふもとで、稲を刈って喜ぶ農夫の歌。

「出たぞ。出た。」

スジェは目を丸くして、坑口を飛び出して叫ぶ。手には土一握りをたっぷり掴んでいた。

「何」と言って、

「鉱脈の筋見つけたぞ。鉱脈の筋。」「うん。」と一言残すと、ヨンシギはスジェの前に矢のように飛びついて来た。あたふたとその土を受け取って、くまなくかき分けて見ると、いかにもこれまで見られなかった赤みを帯びた黄土だった。彼は涙がじんとにじみ、

「これが筋の根元なのか？」

「そうだとも。これが赤い鉱脈なんだ。一袋に五匁（もんめ）ほどは充分に採れるんだが。」

ヨンシギは、喜びより先にぽかんと気が抜けた。笑うべきか泣くべきか。ただ口を半開きにしたまま、スジェの顔ばかりぼうっと眺める。

「こっちに来てみろ！　これが金だってよ。」

まもなく夫は妻を呼ぶ。そして、あたしが何て言った、だからやってみろって言ったでしょ、と恐る恐る近づいてくる妻が一層可愛かった。彼は親指で妻の涙をぬぐってやり、そうしてからぴょんぴょん飛び回りながら穴へ入って行く。

「その土の中に金があるんでしょう。」

ヨンシギの妻があまりに嬉しくて鱈の一夜干しにとてつもなく大きな豪邸まで思い浮かべている時、スジェはてきぱきと

「はい、一袋に五十ウォンずつにはなりますよ…。」と答えながら、今晩にはどうあっても必ず逃げようと考えていた。嘘は長続きしない。嘘がばれて骨も拾えないほど散々な目に遭う前に、そろりそろり逃げ出すのが得策だろう。

朴　鍾祐　（神戸大学国際教育総合センター／人文学研究科）
石塚由佳　（関西学院大学非常勤講師）